日本鳥学会
鳥学ニュース No. 67
1998年5月1日

鳥学からだけでは博物館を語れない，ちょっと情けない鳥学担当

大庭照代

千葉県立中央博物館が開館したのは平成元年の２月で，その4月に私は採用された．建物は真新しく，展示もくっきりし，バブル絶頂期の千葉県が誇る最新の博物館であった．千葉県教育委員会の公募には，分野としては生態の野鳥観察が該当し，職務は学芸関係専門職員として，専門的，技術的な業務に従事する，とだけ書かれてあった．博物館に就職といっても，動物の行動，とくにコミュニケーションや音声に興味があった私は，鳥の死体や剥製標本の取り扱いよりも録音資料の収集を夢見ていた．また，野外観察研究地となる生態園が私の野鳥観察の守備範囲であると理解し，博物館内におけるさまざまな役割は，実際に勤務を始めるまで，まったく想像を超えた世界であった．

当時，自然誌および歴史の多様な分野にまたがる研究員は40名あり，そのうちの２名，すなわち桑原和之氏と私が鳥類学を担当することになった．１つの博物館に２名以上の鳥担当がいることは，日本の自然系博物館では極めて稀な現象である．桑原氏から，調査などでは，私が「野山の鳥」を担当し，「水辺の鳥」は彼がする，というきわめて大雑把な提案があった．ただし，鳥類標本の管理については，桑原氏が全面的に担当し，私は補佐役である．代わりに，私は鳥の音声を中心に録音テープなどの非実物資料を良くも悪くも単独で扱うことになった．

意外にも，私は工事中の生態園業務からはずされて，「便宜的に」旧環境科へと配属された．「野鳥観察」とは別に「自然と人のかかわり」というテーマに，私は突然取り組むことになった．千葉県に特有な谷津田の自然に始まり，歴史的背景，民俗学的な知識，環境科学的な視野まで，一挙に守備範囲が広がった．はっきり言って英国的就業観に漬かっていた私には，公募とはまったく違う仕事内容に驚愕した．それでも，千葉県を知る１つのよい方法として考えることにした．

私は，アオバズクの音声コミュニケーションの研究を，既に一段落させていた．初めのうちは，ヒバリのさえずり行動と複雑な音声構造について考えようとしていた．ところが，研究テーマを出す段階になって，「自然と人のかかわり」という枠組みが，目の前にちらちらして仕方がない．実は，動物行動学や生物音響学の分野では，自然保護や環境保全は問題外という認識が普通

であったが，私にはいつも不思議だった．まだ漠然としていたが，種ごとの個別音も，また地域で聞こえる自然の音全体についても，環境という視点から取り上げようと思い始めたのである．音環境の特徴をどのように記載したらよいのか．その構造や変化をつかむために，何をどう定量化すればよいのか．どのような方法論を取り得るのか．音自体の中に，地域の環境に関する情報がどれだけ含まれ，あるいは地域と関連付けられるのか．

私の意図は，もう鳥学という範疇からは解き放たれてしまっていた．平成２年度の予算要求では，自然の音をテーマに調査研究費を積み上げていた．専門研究として「音による環境の指標」をあげ，千葉県の環境に関する総合研究には「房総の音環境」というタイトルで参加した．県内・県外における音環境資料の収集を念頭に，音環境を捉えるためのサンプリング方法（Oba,1994）から始めて，生態園における照葉樹林内と池岸における音環境の比較を題材に，音環境の単位となる音源種の分類基準の検討を試み(大庭,1995)，さらに千葉市内の環境の異なる３つの小学校区における音環境の比較する中で，音源種の構成内容を生物学的多様性に関連させて評価することを試みた（Oba,1995）．

実は，以上の研究と平行させて，音環境の音響学的特徴の観察を行ってきた．この中で，鳥類の音声が音の時空に占める特異さと多様さに惹かれ，ソナグラムに示される音のパターンの中に種や環境についての情報が含まれると，確信するようになった．問題は，視覚的に捉えられる明らかな違いを定量化し，大量なデータをすばやく扱う処理について，良い方法がわからなかった．たとえば，音環境の構造をパワースペクトラムなどのパターンで比較しようとすると，パターンをまず抽出分類しなくてはならない．パターンの認識を目で行った結果は，個人差もあり途方もない作業であった．この作業を安定化させ，自動化することによって，大量で迅速な処理が可能になるはずだ．

昨年秋，公益信託五峯ライフサイエンス国際基金でタイからPilai Poonswad博士を迎え，サイチョウ類の保護活動における音声行動面からの新しいアプローチの必要性を感じた．その後，森林総合研究所の大谷英児氏より音環境のモニタリングについての打診があり，コーネル大学のBioacoustic Listをとおして海外の研究者との情報交換が始められた．そして，去る3月16日から15日間，平成9年度国外客員研究員として，英国ハル大学電子工学部からDavid Chesmore 博士を迎えたのである．

自然誌の博物館でどうして電子工学か，と思われるかもしれない．科学者は技術者のサポートなしに仕事はできない．コンピュータも，マイクも，音声分析機も正確な情報の収集と整理に不可欠である．しかも，バージョンアップや，新技術の導入が必要である．音声研究においてソナグラムはきわめて親しまれてきた解析法であるが，決して唯一無二の方法ではなく，次世代が開発されている．博士はこれまで大学院生とともに昆虫の音声の自動認識システムをすでに完成させている．今回の来日では，その同じ技術を鳥類やその他の自然の音へ応用する可能性について検討した．結果は，なかなか興味深い．また，講演会とワークショップには32名にのぼる参加者があり，今後の研究交流の可能性を感じさせた．また，筑波大学工学部訪門により，エンジニアとの間で意見や情報交換を密に行う必要性も実感した．今回できた繋がりを保ちながら，鳥類の音声の自動認識はもちろん，自然の音から環境についてのさまざまな情報を取り出す実際的な方法の探索などへ夢が広がる．若い学生には，鳥学はもちろん，数学

洋環境の変動が餌や採餌生態，繁殖生態に与える影響についての研究が多かった．特にエルニーニョが海洋生態系に与えるインパクトを海鳥を使ってとらえようというのは太平洋東岸の海鳥研究者の共通した課題のようである．その意味で彼らは鳥の研究をしているというより，鳥を使って海洋の研究をしているといえる．

これに関連して強い印象を受けたのは，海鳥の研究者と海洋（魚や海洋気象など）の研究者との結びつきが強いことである．たとえば海鳥の餌としての魚の利用可能性を議論する際，日本の現状では漁獲データなどから苦しい推測をするしかないのだが，今回の発表では科学魚探によって直接評価することが普通に行われていて驚いた．日本では海鳥の研究者は海洋研究の分野では孤立している感があるが，魚などの研究者とくむことによってもっと研究の幅を広げられると感じた．

私は天売島でのウトウの餌と繁殖成績の季節変化・年変化について発表した．発表後，アメリカ・カナダのウトウの研究者から質問を受け，意見交換できた．海鳥にとっては海洋が分布の単位なんだと実感する瞬間である．英語については，話す方は，とにかく気合いでカバーしたが，リスニング能力のなさには悔やむことしきりであった．講演は朝８時（！）から始まり，毎晩レセプションが11時頃まで続くというハードなものであった．参加者の多くが会場と隣接したホテルに宿泊しており，３日間ほとんど缶詰状態で会議に出席していた．ポスター会場でもレセプションがあり，皆思い思いのお酒を飲みながら議論をたたかわせていた．会場の近くのモントレー水族館を借り切ってのレセプションもあり，クラゲやマンボウやイワシを眺めながらカリフォルニアワインを飲むのは乙なものだった．

会議後，サンフランシスコからRedwoodの森を越え車で１時間，Point Reyes Bird Observatory (PRBO) に立ち寄る機会を持つことができた．PRBOは1965年に設立された民間の研究団体で，カリフォルニア沖ファラロン島での海鳥の長期研究で有名である．また，海鳥だけでなく，陸上の小鳥類や渉禽類の調査もおこなっている．何となく大きな研究所をイメージしていたら，実際は木立の中の山小屋のような雰囲気を持つ木造建物が２棟だけだった．この小さな研究所から多くの仕事が，と感銘を受けた．研究所の前を流れる小川には秋にはサケが上がるという．すぐそばのラグーンではペリカン，セイタカシギ，ヤマセミが採餌しており，鳥をみるのには抜群であった．私が泊めてもらったPRBOの標識調査のステーションでは，６人の学生が，毎日システマティックに小鳥のバンディングをやっていた．1970年代から固定の網場があり，個体数の減少の様子など明らかになっているそうだ．継続は力なり，とはいえ，あまりに地道な調査にはあきれるやら感心するやらであった．

（総合研究大学院大学　極域科学）

地域の研究グループ紹介

植田睦之

最近の学術雑誌に論文を投稿していたりして，私が知っている関東地方の研究グループを紹介いたします．

渡良瀬のチュウヒの研究グループ（平野敏明　〒320-0838 宇都宮市吉野2-3-15）は，栃木県と茨城県にまたがる

渡良瀬遊水地で４年前からチュウヒを研究しています．ねぐらの環境はかぎられた面積しかないヨシがまばらな下草の密生した場所でそれ以外の植生構造の場所よりも温度が高いらしいことを明らかにしています（Strix 16: 1-15）．

里山自然環境研究会（東　淳樹　東京大学農学部緑地学研究室内　〒113-8657　文京区弥生1-1-1　電話　03-3812-2111　内線5050）は，里山の自然環境をサシバに注目して研究をすすめてます．サシバは里山で繁殖し，農耕地を代表する小動物を主食とするため，農村空間における食物連鎖の頂点に位置し，その生存を保証することでおのずから多数の種の生存が確保される指標性の高い動物です．近年におけるサシバの減少原因と思われる，谷津田環境の減少と質の悪化との関連を明らかにするため，ラジオテレメトリ方により行動圏，環境利用を調査しています．（1997年度鳥学会大会講演要旨）．サシバの生息地の環境利用を明らかにし，それを規定している要因について分析を行うことで，生物相保全のために望ましい環境のあり方を提示したいと考えています．

伊豆諸島カラスバト研究会（市石博　〒259-1105　伊勢原市大住台3-3-5　TEL/FAX0463-91-9455）は，1994年からカラスバトの生息環境の把握と保全を目的に，個体数，食性，ねぐらおよび繁殖行動などに関する調査研究を行っています（Strix 16: 89-98）．調査対象地は主に伊豆諸島地域．

以上，紹介したグループのほかにも，伊豆諸島で鳥だけでなく，爬虫類，昆虫，植物などを含めた研究をしている千葉県中央博物館の長谷川雅美さんたちのグループ（鳥学会誌，45巻83-89にサシバの論文）やカワウのコロニーをデコイを使って移動させたり，分布状況について研究している日本野鳥の会研究センターの成末雅恵さんたちのグループがあります（コロニーの移動については1997年度の大会の講演要旨，集団繁殖地の変遷についてがStrix 15: 95-108）．

（日本野鳥の会研究センター）

各種委員会報告

＜目録委員会＞

鳥の和名について：「カタシロワシ」と「カタジロワシ」ほか

藤巻裕蔵（目録委員会委員長）

昨年発表した「日本産鳥類リスト」では，「カタジロワシ」となっています．これは，分類委員が書いた案をそのまま採用したものです．ところが，一会員から，「カタシロワシ」と「カタジロワシ」のどちらの和名が正しいのかとの問合せもあり，調べたところ，以前「カタシロワシ」が使われていたことがわかりました．目録３版までは「カタシロワシ」が使われていましたが，目録４版で「カタジロワシ」になっています．変えられた根拠や経緯は明らかではありません．また，目録５版では英語版の方は「カタシロワシ」，和文版の方は「カタジロワシ」と統一がとれていません．

この和名について目録編集委員会として検討した結果，和名を最初に使われていた「カタシロワシ」に統一することにしました．なお，参考までに目録以外の図鑑など

での状況をみると，現在最も広く利用されているとおもわれる日本野鳥の会の「フィールドガイド日本の野鳥」は英語版も日本語版も，また文一総合出版の「日本のワシタカ類」は「カタシロワシ」を採用していますが，平凡社の「日本動物大百科」と大学書林刊の「世界鳥類和名辞典」は「カタジロワシ」で，統一がとれていません．

次はシベリアジュリンの亜種の和名についてです．「日本産鳥類リスト」では，*Emberiza pallasi polaris*をキタシベリアジュリン，*Emberiza pallasi pallasi* をシベリアジュリンとしましたが，後者の方が迷鳥ですので，「リスト作成のための指針（7）種・亜種の和名」に従って次のように変更することになりました．*Emberiza pallasi polaris* Middendorff, 1851　シベリアジュリン，*Emberiza pallasi pallasi* (Cabanis, 1851)　オオシベリアジュリンです．オオシベリアジュリンの亜種名はすでに目録3版，山階の「日本の鳥類とその生態」，「鳥」10巻49号，森岡（1957）の「シベリアジュリンの日本初記録」で用いられています．

＜鳥類保護委員会＞
鳥類保護委員会から報告とお願い

中村　司

昨年の鳥学会の際，阿部学委員長，樋口広芳副委員長，山岸哲前会長，藤巻裕蔵委員等の辞任に伴い，前からの委員に加えて数名の方々の推薦をいただき，その後，新委員の方々から就任のご了解をいただきました．次の方々が1998年1月1日から99年12月31日まで鳥類保護委員を担当することになりました．

中村司（委員長），石田健（副委員長），福田道雄，唐沢孝一，早矢仕有子，山崎亨，呉地正行，須川恒，大迫義人以上9名の方々です．今のところそれぞれが所属している資格で国内外の保護会議に出席したり鳥類の保護活動に当たっております．そこで会員（委員）の方々にお願いですが，委員長か副委員長の石田評議員かに，どういう保護の会に所属しておられ，具体的にどういう会議に出席されたか，どういう保護活動に参加されたか，またご注文などをお寄せ下さるようお願いいたします．次回それらをまとめてニュースに報告いたします．

中村：400　甲府市山宮町1286－2
(Tel &Fax 0552-53-3989)
大学演習林研究部
石田：113　文京区弥生1－1－1東京
(Tel: 03-3812-2111(5490)
Fax: 03-5689
Ishiken@uf.a.u-tokyo.ac.jp)

特別寄稿
私の便利グッズ（1）手ぶれ補正機能付き双眼鏡

松岡　茂

皆さんは，高倍率の双眼鏡，それも手ぶれ補正機能付き双眼鏡を，どのような状況で使おうと考えるでしょうか．開けた水域や草原での水鳥や小鳥類あるいは上空を舞う猛禽類の観察を第一に思い浮かべる人が多いのではないでしょうか．私は，この双

眼鏡を森林内で使い始めたところです．その結果，小鳥類のカラーリングの確認に有効に使えることがわかりました．機種は，Canon 15x45ISです．この機種のよい点は，以下のとおりです．

1）手ぶれ補正機能は効果が大きく，また高倍率のためかなり遠くからでもリングの色が明瞭に確認できます．ただし，近くにやってくるカラ類を追うのは大変です．

2）機動性が増します．今まで一脚（あるいは三脚）と望遠鏡を持ち歩いていたのが，これ一台で大方の観察ができるようになります．特に冬期間スキーで歩くときは，調査が楽になりました．

3）望遠鏡より相当早く鳥を視野に入れることが可能です．

4）いままで使っていたいくつかの双眼鏡は，焦点調節つまみが冬期間の低温のため硬くなりました．私は，多少ガタはでますが，自分で分解してこの部分の油を抜いていました．しかし，この双眼鏡はそのようなことがなく，マイナス十数度でも滑らかに焦点調節が可能です（この点は，他のメーカーも見習ってほしいですね）．

5）標準で接眼レンズキャップがついていて，多少の雪や雨のときに役立ちます．

6）アイレリーフが15mmと比較的長いため，眼鏡使用でも使いやすくなっています．

7）ZEISSの手ぶれ補正機能付き双眼鏡（63万円）に比較すれば相当低価格（16.5万円）です（でも，まだ高いと思います）．

ただ，いいことばかりではありません．改良すべき点は以下のとうりです．

1）電池の消耗が激しく，とくに低温時の使用時間は短いものとなっています（取扱説明書によれば，気温マイナス10度では単三型アルカリ電池で，わずか5分間しか連続使用できません．同条件でニッカド電池では50分です）．しかし，実際に使ってみると，脚環の確認だけに手ぶれ補正機能を使うのであれば，冬期の使用でも電池の消耗はそれほど気になりません．

2）双眼鏡を首にかけて歩いていると，視度調節リングが動いてしまいます．双眼鏡を覗いてはじめて，このことに気付きあわてて調節し直すことがたびたびあります．他メーカーの一部の双眼鏡のように，この部分をクリック式にして通常の使用では動かないようにする必要があります．

3）手ぶれ補正機能のスイッチを押した瞬間，像が一瞬ずれてから安定しますが，気になります．

4）重さは，この機能で1 kgちょっとなら満足できるものですが，さらに軽くできると使い勝手がよくなると思われます．

5）手ぶれ補正スイッチは双眼鏡の右側上面にあります．右手人差し指でスイッチを押したまま焦点を調節するには，左手人差し指を使わなければなりません．普段右手の人差し指で焦点調節を行っている人には，このスイッチの配置は，使いにくいかもしれません．

（2）デジタルメモリリコーダ

鳥の行動の観察記録にテープリコーダの活用が考えられます．連続して行動を記述することができますし，野帳に書いている間に鳥の姿を見失うということも避けられます．

最近，ICメモリを使ったリコーダが出回るようになりました．テープレコーダと比較すると，テープが不要，録音内容のランダムアクセスが可能，メモリの最後尾から録音するので間違って上書きするすること

がない，消去が簡単などの特徴があります．私の知る限りSONYと東芝が製品を出していますが，現在私が使用しているのは東芝のDMR-60という機種です．

この機種を選んだのは，録音時間が約58分と長いこと，録音件数が最大99件と（購入当時としては）多かったこと，録音スイッチが間違えようがないところにあり冬期間手袋をしたままでも容易に操作できるという理由です．形も棒状で，ポケットに入れておいても違和感がありません．

取扱説明書によれば，使用温度範囲は0度から40度となっていますが，マイナス10数度の野外でも，問題なく使えています．また，電池寿命も十分です．

改良してほしい点は，野外で使うことを想定していないのでしょうが，せめて日常生活防水機能はあってもよいでしょう．ポケットなどに入れたときに止めるクリップの位置はよくありません．行動記録とは関係ありませんが，広い部屋での会議などの発言録音には，ほとんど使えません．ただし，頭上10mくらいのところにいる小鳥類のさえずりは，音質はよくありませんが，一応録音できます．

また，もっともほしい機能は，録音時の時間を同時に記録してくれる機能です（SONYの最新型にはこの機能があます）．時計を見て時刻を読み上げるという簡単な動作ですが，鳥の行動記録を中断することにもなり避けたい動作です．

（森林総研北海道支所）

事務局より

＜お知らせとお願い＞

1．会費納入状況の見方

宛名ラベルの最下段に会費納入状況が印刷されています．「98年収支　-5000」は98年度未納，「98年収支0」は98年度納入済み，「98年収支5000」は99年度納入済みを意味します．

2．会費納入はできるだけ郵便振替でお願いします．銀行振込の場合は記帳しないと，納入された方の氏名がわからず，事務処理が遅れますので．

3．購読会員の方は，納入のさい入会したときに登録した名前（例えば，会社名，団体名など）を書いてください．それ以外の名前（例えば，代表者や担当者）では，会計処理ファイルで会員をさがすのに時間がかかり，事務処理上非常に困ります．

4．事務局への問合せは，出来るだけFAX，手紙，電子メールでお願いします．事務局として使用している電話は，事務局員の柳川さんがいる部屋の隣，藤巻の部屋にありますので．

FAX：0155-49-5504

e-mail：fujimaki@obihiro.ac.jp

5．鳥学会大会の講演要旨1993年，1995年，1996年の残部が事務局にあります．希望者には1冊1000円でおわけします．

特別寄稿

＜お尋ね＞

片山　善仁，島根野鳥の会（代表・内田映），鈴木悌司，大槻都子（敬称略）
以上の方々の住所が不明となっております．事務局までお知らせ下さい．

**********募集！！！学会シンボルマーク**********

日本鳥学会のシンボルマークを募集します．シンボルマークは学会誌など学会の刊行物などに使用します．採用されたシンボルマークの作者には感謝状を差し上げ，作者の名前を刊行物のどこかに記載いたします．奮ってご応募ください．なお，作品の送り先は事務局です．

編集担当より

各地域の調査研究活動を紹介する記事をお待ちしています．研究グループや個人の了解のうえで連絡先などを紹介いただけると助かります．第１回目として，今回は関東地方でグループで研究をしている団体について植田睦之（日本野鳥の会研究センター）さんに紹介していただきました．もし，この中に興味のあるグループがあれば，連絡を取られたらいかがでしょうか？

原稿送り先
〒060-8589　札幌市北区北９西９北海道大学農学部応用動物　綿貫　豊
TEL: 011-706-3690, FAX: 011-757-5595
E-mail: ywata@res.agr.hokudai.ac.jp （メールでの原稿も歓迎します）

編集後記

編集も２回目ともなると慣れてきました．作業も多少は早くなった気がします．今回の編集はフィールドと平行していたので，なかなかスリリングでした．編集作業が遅れないようこれからも頑張りたいと思います．（岩見）

鳥学ニュース　No.67
1998年５月１日　　発行　　（会員配布）
発　行　　**日　本　鳥　学　会**
〒080　帯広市稲田町西２線11　帯広畜産大学　野生動物管理学研究室気付
TEL. 0155-49-5500　　FAX. 0155-49-5504　　郵便振替口座 00110-0-6599
発行人　　藤巻裕蔵
編　集　　綿貫　豊

とくにコンピューティングの素養を身につけてほしい．

バブルがはじけ，博物館はこれから大変な時代に入る．博物館予算は想像を超えた厳しさである．たとえば，専門書など備品購入がこの２年間ゼロで，もはや鳥学書は一冊も買えない．今年度の資料整理等の賃金は，昨年度の４分の１しかついていない．私が収集する生物音響資料関係の保守や整理について，やっと3日確保できるばかりだ．展示や教育普及活動についてもお金はかけられない．調査研究費における県費の確保もかなり難しく，外部の研究助成金が今後ますます必要になろう．残念なことに，たとえ助成があっても，調査や学会発表などのために海外に出ることに対して，博物館の勤務に差し障りがあるのではという判断が示されている．館員1名につき年１回の海外出張（旅費別途）までは評価されてきた，と思っていたのは楽観的過ぎたか．

中央博物館は，勝浦市に今年度開館予定の海の博物館(仮称)や，山の博物館(仮称)準備室も加えて，今や総勢97名（学芸61 普及９ 庶務９ 展示解説員18）となった．運営の基本方針の１つは，「世界に通用する創造的な研究を行って，県民の知的資産を増大し，学問の発展に寄与する」というものである．これを絵に描いた餅とするか，または心の糧とするかは，研究員次第である．自然の音の研究も，きっと「野鳥観察」の楽しさに結びつくと私は信じている．

（千葉県立中央博物館）

掲　示　板

［日本鳥学会福岡大会のお知らせ］

日本鳥学会1998年度大会は北九州大学で開催されます．

会期：11月20日（金）～23日（月）

会場：北九州市　北九州大学

日程：第１日目：11月20日　各種委員会，評議員会
　　第２日目：11月21日　口頭発表，シンポジウム，自由集会
　　第３日目：11月22日　ポスター発表，総会，公開講演会，懇親会
　　第４日目：11月23日　口頭発表，自由集会

シンポジウム：鳥類学におけるＤＮＡ研究（仮題）

エクスカーション：11月24日　北九州市周辺（曽根干潟，響灘海岸など）

大会参加・講演申込締めきり　７月31日（金）

今年は国際鳥類学会の開催年でもあり，例年に比べて２ヶ月ほど遅い開催となりました．年間の行事計画をお間違いなきようお願いします．曽根干潟のズグロカモメともども皆様のおいでをお待ちしています．詳しくは６月発送予定の案内をご覧下さい．

連絡先：〒812-8581
福岡市東区箱崎6-10-1　九州大学理学部生物学教室
江口　和洋
TEL: 092-642-2625　Fax: 092-642-2645
E-mail: kegucscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp
（大会準備委員長　江口和洋）

掲示板

第４回日本野生動物医学会大会

会場：北海道大学クラーク会館（札幌市北区北８条西８）

会期：1998年８月23日（日）・24日（月）・25日（火）

シンポジウム：テーマ＜希少鳥類の飼育・繁殖と野生復帰＞

主旨：DNA分析などによる種内の遺伝的多様性の問題，野生復帰を念頭に置いた飼育・繁殖状の問題，復帰技術ならびに復帰環境の保全・復元の問題を扱います．

参加申し込み：1998年６月19 日締め切り

連絡先（大会事務局）：069　北海道江別市文京台緑町582－１　酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室　浅川満彦　Tel: 011-396-1111, Fax: 011-387-5890,
e-mail: askam@rakuno.ac.jp

5th World Conference on Birds of Prey and Owls

Of the World Working Group on Birds of Prey and Owls

4 August to 11 August 1998

In Midrand, Johannesburg, South Africa

問い合わせ先：Mr. Robin Chancellor, Hon. Secretary of the World Working Group on Birds of　Pery and Owls,

15b Bolton Gardens, London SW5 OAL, UK

Fax: +44-171-370-1896

公益信託増進会自然簿後環境保全研究活動助成基金の案内

絶滅の恐れのある小動物の保護増殖，環境保全と回復のいずれかの調査研究をおこなっている，学校教員，大学他研究機関の研究者の活動に対して１件50万を助成します．締切は５月30日．問い合わせは，公益信託増進会自然簿後環境保全研究活動助成基金事務局（自然環境研究センター内，Tel: 03-3812-1881）．

第25回太平洋海鳥会議に参加して

高橋　晃周

去る1998年１月22～24日にかけて，カリフォルニアのモントレーで太平洋海鳥グループ(Pacific Seabird Group)の第25回年次大会がおこなわれた．参加者は200人くらい，ほとんどはアメリカ・カナダの研究者で，日本からは北大の綿貫さんと私が出席した．

Seabirds in changing ocean というタイトルで18題の記念講演が行われ，25年間の太平洋域での海鳥研究について，海上での行動，エネルギー生理学など，様々な研究分野でのレビューがおこなわれた．そのほかに66題の口頭発表，52題のポスター発表があった．内容としては，60題（約半数）が，海鳥の個体群の現状，保全に関するものであった．このうち36題が，マダラウミスズメについての報告で，個体数の減少が懸念されるこの鳥への調査・保護活動の活発さが現れていた．その他の発表の多くは採餌・繁殖に関連したもので，海